一般口演 | その他

一般口演36（ III-OR36）
その他

座長:川崎 志保理（順天堂大学 心臓血管外科）
座長:橘 剛（北海道大学大学院医学研究科 循環器・呼吸器外科）
Sat. Jul 7, 2018 1:00 PM - 1:55 PM 第4会場 (303)

[III-OR36-04]両側肺動脈絞扼術に対するバルーン拡張術の有用性

○山下 尚人[1], 倉岡 彩子[1], 兒玉 祥彦[1], 石川 友一[1], 中村 真[1], 佐川 浩一[1], 石川 司朗[1], 小田 晋一郎[2], 中野 俊秀[2], 角 秀秋[2] (1.福岡市立こども病院 循環器科, 2.福岡市立こども病院 心臓血管外科)
Keywords:両側肺動脈絞扼術, 経皮的肺動脈バルーン拡張術, 肺動脈狭窄

【背景】左心狭窄疾患に対して両側肺動脈絞扼術(bPAB)による待機手術が有用とされるが、一方で肺動脈狭窄のリスクが上昇することも報告されている。当院では Norwood+BDGや二期的根治術症例に低酸素血症改善や肺血管発育を目的として、バルーン拡張術(BAP)を行っている。【目的】 bPABに対する BAPの有効性を明らかにすること。【対象】2015年7月から2017年8月までに bPABを施行した41例のうち、 BAPを行った15例(36.5%)を対象とし、診療録より後方視的に検討した。【結果】男児10例、疾患は HLHS /類縁疾患6例、左室流出路狭窄＋ CoA/IAA complex 5例、単心室＋ CoA/IAA complex 3例、総動脈幹症1例。在胎週数は平均38.1週、出生体重は平均2647g、胎児診断症例が10例。平均8.7生日で bPABを施行し（周径9-11mm）、7例に絞扼テープを2段階に結紮する工夫を行った。 BAPは bPABから平均126日で施行し、主に3.5mm（3.25-4.0）の冠動脈バルーンを使用した。 BAP後、 SpO2は平均77%から84%に上昇した。1例で一過性房室ブロック、1例で房室弁逆流増悪を認めた。平均217生日で9例が Norwood手術または根治手術へと進み、そのうち5例は肺動脈形成が不要であった。PAIは平均で bPAB前183 mm^2/m^2から根治手術前284 mm^2/m^2と上昇した。根治手術前の PAIは BAP未施行群（162 mm^2/m^2）と比較し、 BAP群がより大きい傾向があった（ p=0.11）。さらに PAIの上昇は bPABを工夫した群（Δ141 mm^2/m^2）で、工夫なし群（Δ94 mm^2/m^2）より上昇した（ p=0.09）。【結語】 bPABに対する BAPは、低酸素血症改善や肺血管発育に有益であり、重要な治療選択の一つになる。

©Japanese Society of Pediatric Cardiology and Cardiac Surgery